



20

(表紙の説明)

『母さん部隊長』

(読みあける。適宜の紙やかな筆をくけても可)

『男ばかりぢや戦へぬ』

銃後のまもりがあればこそ

貯蓄と節約わがつこめ

家も富ませる、國まもる』

(めぐりつゝ)

(母)

「あ、いそがしく、ほんたうに！」

(母は何か言へば「ほんたうに！」と言ふ癖がある)

昭和十四年三月卅一日印刷納本
昭和十四年四月五日發行

版權所有

編輯人 東京市目黒區駒場町九三二番地
砥上峰次

印刷人 相場勝雄

印刷所 東京市日本橋區茅場町一丁目七番地(茅場町會館)

發行所 東京市神田區一ツ橋 教育會館内

日本教育紙芝居協會

編發東京六二五三〇番

紙芝居「母さん部隊長」



1

(母)
「朝から横町の源さんの見送りに行つて、すぐに婦人会の打合せでせう。やつこ
すんだらみんなにかまつて、やれ嫁とりだ、病人だ、夫婦喧嘩だつていふ話で
せう？ほんたうに！」

(じくりつこ)

(母)「〇お」
「母さん、おみや」

(弟)「四お」
「僕にも」

(娘、春江)

「わたしには？母さん」

紙芝居「母さん部隊長」



2

(父)
「わしにもあるのかい？」
(母)
「みんな呑氣なこぼつかり。非常時ですよ、ほんたうに！それより、春江さん、お晝にませう。會社のお休みの日でもないし、御料理の御稽古もできませんから、ほんたうに！」
(めくろ)

紙芝居「母さん部隊長」



3

(母)
「お友だちの約束なら仕方がないけど、今日は叔母さんがわざわざあの話で来てくれるのよ。遅くならないやうに歸るんですよ、ほんたうに！」

(春江)
「大丈夫よ、母さんたら、さうほんたうに／＼つておつしやらなくても。だけどわたし一生獨身主義なの」

(母)
「まア、ばかなことを言ふものぢやありませんよ、ほんたうに！」

(サシコミめくる)

(叔母)
「姉さん、今日は」

(母)
「あら、早かつたのね。春江に逢はなかつた？」

(叔母)
「い、え。出かけたの？」

(めくもつ)

(母)
「え、さ、まア、おあがんなさい」

紙芝居「母さん部隊長」





(母)
「ほんごにあの娘にや困るのよ。さつきも獨身主義だなんて生いきなことを……」

(父、ほんたうに！と言はうとるのをきかやうじ)

(父)

「それで、先方の親御さんはどうです？ちご變人ださうだが」

(サンコミーめくる)

(叔母)

「正直一徹つて言ふんですよ。何でも銃後のつごめは貯金が第一だつていふんで、あんまり熱心だものですから、貯金爺さんなんて紳名がついてるさうですけど、變人なんてことはありませんよ。たゞ親一人」

(サンコミーめくる)

「子一人でせう。だから急いでるんですよ。でも感心な息子さんちやありませんか。隊にゐて貯めた貯金が二百圓近くなつたんですつて。体は丈夫だし、そこへ、親子そろつて春江さんが氣に入つたつて言ふんですよ。なアに、この非常時ですもの、仕度なんかもか、りませんしね」

(母)

「でも、やっぱりそれはねエ」

(めくろつし)

(叔母)

「實はね、今日も」

紙芝居「母さん部隊長」





〔そのここで叔母さんが来るの〕

〔ずるいわ、春江さん。今までかくして、どんな方？〕

〔工場にゐる人。戦争に行つて、今度歸つて來たの。とつても眞面目で、こちくらしいのよ。わたし、けちんぼだつたら、いやだと思ふわ〕

〔まじめとけちんぼは別でせう〕

〔こらんないよ、ドイツ人らしいわね〕

〔この箱でよろしうございますか〕

〔いゝえ、ありがたう〕

〔わたくし箱要りません〕



6

(ドイツ)
「前の時、あなたが箱を私にあげましたね。今日再び持つて来ました。こゝに
あります。これでけっこう。
日本は戦争ですべてを大切にしますね。新しい箱も大切にしますね」

(友人)
「まあ春江さん。感心な方ね」

(めぐりつ)

(春江)
「でも、わたしは何だか」



〔母〕「けち臭いやうな氣もしたわ」

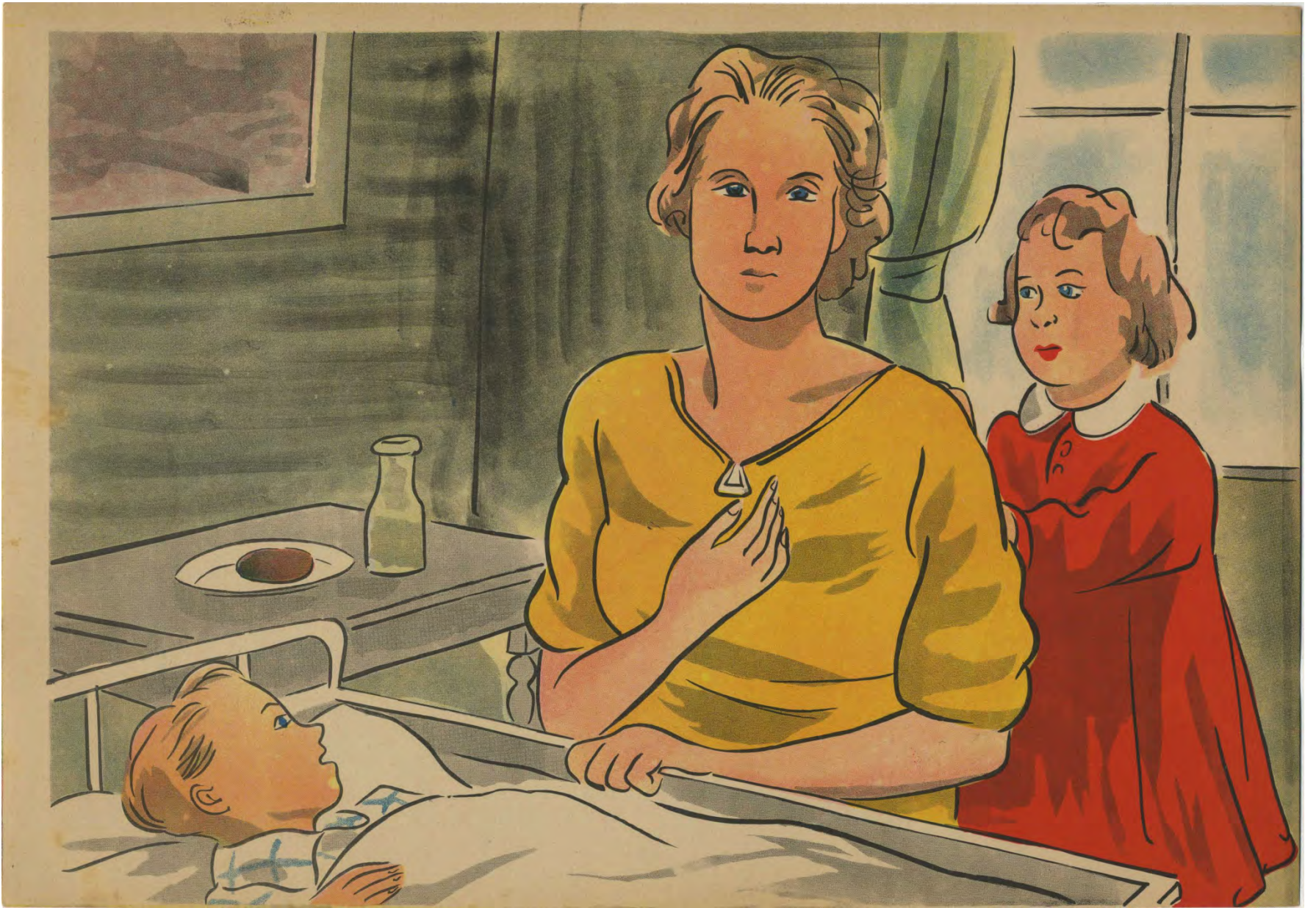
〔弟〕「儉約さけちこはちがふよ。ねエお父さん」

〔父〕「そりやちがふこも。春江はまだ考へが足らんやうだね」

〔妹〕「あらお姉さん!!ラヂオでその話してるやうよ」

〔チオの講義者の聲〕「で、その感心なドイツ婦人は大使館の方の奥さんでしたが、かう説明されました。」

〔めぐりつゝ〕「今から廿余年前、あの大戰のとき、ドイツでは何もかも足りなくなつて」



「病氣の子供に飲ませる牛乳さへなくなりました。パンと言へばまつくろな、薬いじり屑くずなごをませたもの、それでもあればまだいゝ方だった。けれど、ドイツの婦人たちは歯をくひしばつてがまんしてきた。ごんな儉約けんやくでもして、ごんな努力どりょくでもして、戦ひぬいてきた。
(めくりつゝ)
いま、盟邦日本は勇ましくも大きな戦争をつゞけ」



(ラヂオの聲、ついで)
「大陸では未曾有の建設がはじまつてゐる。この大事業をなしこげるには金と物を大切にすることが絶対に必要である。
もしも節約と貯蓄を怠ればあの時の二の舞になる。だから自分が今日行つたことは日本に住み日本を愛する女性として極めて當然のことにすぎない。
かう説明されたのであります。
(めくりつゝ)

まことに婦人こそは」



〔チオの聲〕
「武器を持たぬ兵士であります。このドイツ夫人に對して恥しくないだけの覺悟を
われ／＼は果して持つてゐるでせうか」

〔春江〕
「まア、さうだつたのか」

〔弟〕
「それごらん姉さん」

〔母〕
「なる程ねエ。私達もまだ／＼覺悟が足りなかつたのですよ、ほんたうに！」

〔父〕
「うーむ、どうだ春江。いや春江ばかりぢやない。これからひそつ 母さんが

この家の貯蓄と節約の部隊長になつて、大いにやつたら」

〔母〕
「やりますともさ、ほんたうに！」

「賛成々々。母さん部隊長 萬歳！」



(母) 「エヘン。では さつそく、こゝに第一回の家庭戦時會議を開くことに
いたします。皆で色々節約のしかたを工夫して見ませう。ではまづお父さんから」

(父) 「わたしは(と、サシコミ少々引)断然お酒を……エトお酒の量を三分の一にへらす。
終りッ」

(母) 「ちや、春江さん」

(春江) 「わたしは、さうね(と、少し引き)まづ着物を新しく作るのをやめるわ、古いのを
つくらふやうにして。つぎがあつたつて、恥しくないわけですもの」

(弟) 「僕は(と、少し引き)鉛筆やノートをムダにしないやうにしよう」

(妹) 「あたしはね(と、少し引き)糸くづや何かを集めるさい、と思ふわ」

(父) 「さう。一握りの屑でも、マッチ一本でも、ムダにはできない。塵も積れば山だ。
ところで、母さん部隊長は」

(サシコミ引き抜き終る)

(母) 「本官は、大いに經濟を勉強して、まづ家計簿をきちんとします。毎日のおかずも
献立表をつくつて……豫算をはつきりたて、……さう、天引き貯金をしなければ
ためね、ほんたうに！」

(めくる)

紙芝居「母さん部隊長」





(弟)
「お風呂屋へ行くのよして、貯金箱に入れようつと」
(父)
「お、そりやいけない。貯金の心掛けは感心だが、衛生は守らなければいけないだよ。勉強や体にさわるやうではならん。
今日は汗をかいてきたのだから、入つておいで」
(しづかにめぐりつゝ)
わかつたとなればすやに熱心になる、氣持ちのよい一家です。この晩をきつかけに、
拙つて覺悟を新たにしましたが、



中でも春江は自分のうわついた心から立派な行ひをけちんば扱ひにしたことが、
今更ながら恥かしくてなりません。

(春江、心の中で)
「考へてみると、今度の話しだつて、心の底では進んでゐながら、みえに捉はれて
ゐたのだつた。もうわかつたから大丈夫。誰にも負けないでやらう！」

(めぐりつゝ)

傳吉君もいよゝ除隊になつたので、

今日は春江さんのところでは家中そろつて、貯金爺さんの家を訪ねました。



(父)
「われ／＼も近頃やつと目がさめました、あなたの貯金のはうはお忙しいでせう」

(母)

「ハツハ、い。いや、一向お役に立ちませんが、おかげ様でぼつ／＼。」

しかし、一時限りのお祭り騒ぎが一番こわいさわしは思うります」

(母)

「全くさやうでございますわねエ、ほんたうに！」

(母)

「ごうだね、嬢ちゃん」

(サシヨメ)

「貯金の話をしてあげようか」

(母)

「お父さん！」

(母)

「日本が今年中にためねばならん金はね、

(母)

皆で百億圓」

紙芝居「母さん部隊長」





(母さん)
「い、かね、十圓札で積むと、富士山の二十倍以上にもなるんだよ。
ごうだ、大したお金だらう。これだけ日本はごうしてもためねばならん」

(調子をかへて、強く)

百億圓。

百億圓。

戦争に勝つためには、

東洋平和のためには、

どうしても必要な百億圓！

(母さんの体が現れるところまでめくりつゝ)

(調子をかへて、母の独白)

「それで、これだけの貯蓄をいたしますには、ごうしても私たち家庭の主婦たる
ものを中心になつて働かねばなりません。」

後方勤務は貯蓄と節約。この二つを必死にはげみまして」

(めくも終る)



(母)

「男子の方々の決死の活動に力を協たすけますこそ、ほんたうに第一のつこめでございます。それなのに、自分一人ぐらゐはごうでもよからうと考へることは、大きなまちがひ、一人々々の力が残らず集つてこそ、はじめて國の大きな力が現はれるのであります。

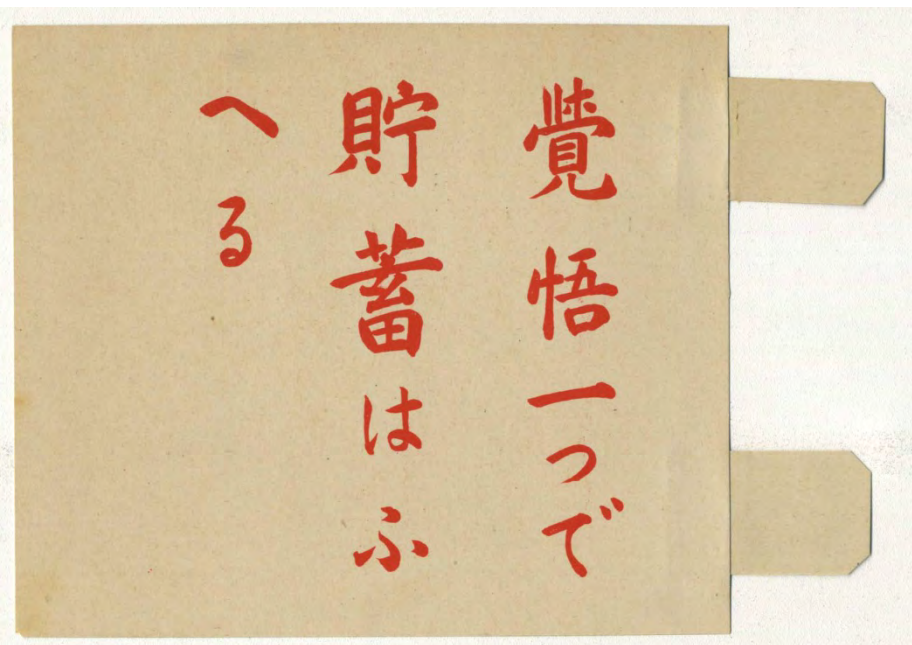
もちろん色々難しい事もありませうが、つまりは覚悟一つでございます。この覚悟のあるなしによつて、御國が立つか立たぬかといふ、せと際きわなのだと思ひます。よく申しますたごへに。」

(サシこめくる)

「暮しこいふものは濡手拭ぬでぬぎと同じこと、引つばつたのでは何も出ないが、絞ればタラ〜チャラ〜といくらでも余分の出るものであります。

私共ではおこがましいございますが、わたくしが、あのオ一家の貯蓄部隊長に就任いたしました、色々工夫いたしましたら仲々馬鹿にできないきつめきつめがございました」
(めくりつ)

「近々、娘を嫁がせますが」





(母)
「ぜいたくな嫁入衣裳などはだんぜん造らないことに決めました。
この非常時には、ぜいたくな着物を却つて恥しくて着て歩けませんわ。却つて
継ぎの當つた着物のほうが、これほど奥床しいか判りませんわ、ほんたうに！」
(めくりつ)
かうして、今では貯金組合の幹事となつた母さん部隊長の娘の春江さんご、



貯金爺さんを父に持つ傳吉君との晴れの結婚、似合の夫婦。
衣裳も借着なら御馳走も手造り。

その代り、思ひ切つて節約した結婚費用の残りは、二人あはせてこの通り、債券に
變へました。

これこそほんたうに、銃後の新家庭のいちばんの誇りです。

(めくりつゝ)

「おめでたう〜」

銃後の主婦は蓄貯の後銃



母さん部隊長や主婦部隊長 キラ星の如く立ち並び、貯金帳に威儀を正してお喜びの一斉射撃です。

「春江も今日からレツキとした母さんーちやアまだないけど、花嫁部隊長よ。しつかり頼みますよ」

「ほんたうに！」

「では皆で私たちの標語をこなへませう。」

一、二、三、

銃後の貯蓄は主婦の手で

銃後の貯蓄は主婦の手で

(終)